

国立研究開発法人国立環境研究所が平成 29 年 4 月に当センターに設置した琵琶湖分室と、国立環境研究所が有する湖沼の底泥環境や生態系の解析評価にかかる先駆的な研究実績や知識を基に、琵琶湖流域生態系の保全再生に向け、共同研究を推進します。

湖沼の生態系の評価と管理・再生に関する研究

琵琶湖生態系を代表する生物として在来魚に注目し、各種について適切な保全・管理・再生手法を提案するため、それぞれの種の回復に必要な環境因子の解明に挑む。また、研究の基礎となる生態系の評価をより高精度なものにするため、最新の技術を応用したモニタリング手法の検討を行います。

【現状における課題】

- 琵琶湖では、かつて大量に生息していた多くの在来魚が激減している。
- その原因や回復に必要な環境因子は、おそらく種によって異なるが、詳細は不明である。
- 生態系評価の基礎となるモニタリングデータの精度が不十分である。

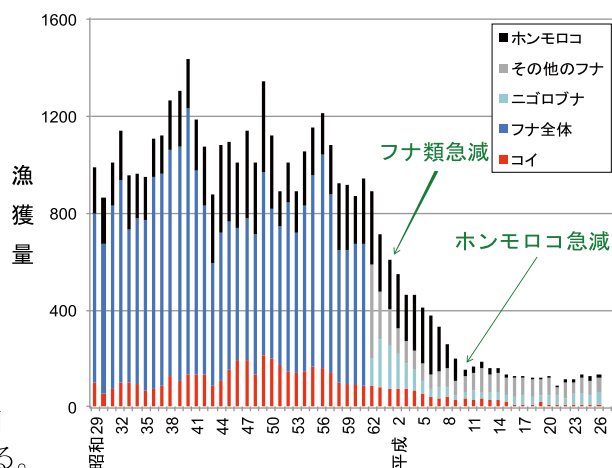
【課題解決に向けた対応】

1 琵琶湖生態系の 保全・管理・再生手法に関する研究

- 在来魚各種について、その回復に必要な環境因子を、野外調査、既存データの収集、および結果の統計解析などを通じて解明する。

2 生態系評価のためのモニタリング手法の検討

- 環境DNA解析や遠隔観測など最新の技術を活用した生態系評価のモニタリング手法を開発する。



琵琶湖におけるホンモロコ、フナ類、コイの漁獲量の推移
近畿農政局滋賀統計事務所発表の統計値をグラフ化した図

- 在来魚の回復に向けた保全・管理・再生手法の提案
- 高精度な生態系評価を可能とするモニタリング手法の提案